

# 形容詞文の意味と知覚の主観性

山 岡 政 紀

## 0. 目的と出発点

形容詞の分類の一つに、「属性形容詞」と「感情形容詞」の二分法がしばしば用いられる。筆者は、この二つの形容詞群を述語とする構文のそれぞれの特徴を情報帰属理論を用いて記述する構想を持っている<sup>1)</sup>。

本稿の目的は、その前提として、形容詞述語文の意味について考察をしておくことである。本稿では「形容詞」という品詞の一般的な性質を出発点とするが、その次段階でモダリティとの関与の仕方を論じるため、資料としては、連体用法や副詞的用法（連用形）を除外し、専ら形容詞述語文（以下、形容詞文と称する）を用いる。

形容詞文自体が、主にどのような目的を遂行するために発話されるかは、動詞文での場合に比べて均質的である。それを一口に言うなら「報告」であり、もう少し厳密には、次のように言うことができる。

### (1) 感じ手が、自己の内外の事象に対して与えた評価の報告

ここで、「感じ手」は知覚の主体である<sup>2)</sup>。ここで、言語以前の段階としての知覚が前提としてある。言語化するのには、それについて何らかの目的に応じた報告が動機づけられ、報告内容をその報告目的に照らして評価を加え、そしてそれに基づいて報告がなされる段階においてである。

このような形容詞文の意味について考察するためには、人間の知覚の質そのものに関する認識論的な考察が必要となる。そのため、本稿は全体的に言語研究の領域を越えて、思弁的な言語哲学めいた論述となっているが、形容詞意味論研究の一段階として避けられないと考える。

## 1. 「感じ手」の存在

形容詞文には、「感じ手」が形式化しているか、さもないと必ず潜在的に存

在している。

- (2) それがまたこの上なくおもしろかったのです。
- (3) にいさん来てよ……もう沈む……苦しい。
- (4) 私はそれが恐ろしかったのです。
- (5) あなたお寂しいでせう。
- (6) 浅井はそれがうれしいのだ。
- (7) うちのおやじは、あなたのおやじがよほど憎いんだわ。

「感じ手」と「話し手」とを区別する必要があるのは、疑問文や(5)のような例で両者が一致しないためである。

(3)～(7)は、いわゆる「感情形容詞」に属するもので、「感じ手」の存在はよく理解できる。(2)は中間的とも言われ、いずれに分類するのか、第三のグループを立てるのか、しばしば議論されるが、「感じ手」の主観的な評価であることは疑いない。

問題はいわゆる「属性形容詞」の方である。

- (8) 日本は何ととっても国土が狭い。
- (9) この列車は、速いねえ。
- (10) バスケットボールは、ずいぶん重いものだ。

(8)～(10)のように、「感じ手」が形式上表れていないばかりでなく、その存在が不必要と思われるケースが多い。これらは、物理的事象の報告だから、「感じ手」という主観の存在を必要としないと考えるのが普通だろう。しかし、敢えてそこに問題提起をしてみたい。

「狭い」、「速い」、「重い」のいずれに於いても、それは人間の知覚によって感じ取られるものである。従って認識論的に言えば「感じ手」は「話し手」である。しかし、確かに(8)～(10)では、「感じ手」の存在が意識されず、従って、それを表す形式も示されていない。このような発話が行われる際には、含意として、誰もが同じ様に知覚しているであろうという話し手の信念が必要である。つまり、話し手は自分だけでなく、「一般者」もまた「感じ手」に含まれると見なしているわけである。このように「一般者」を含んで潜在化した「感じ手」を、「潜在的感じ手」と呼ぶことにする。なお、(2)や(3)に見られる、感情形容詞の人称指定や文脈等の原因による「感じ手の省略」と、ここでの「潜在的感じ手」とは明確に区別しなければならない。

次に、「一般者」と異なる知覚を持ったと見なされるなどの理由により、「感じ手」が限定されて形式上に表れてくる場合がある。それが、(8)'～(10)'である。

(8)' 日本は我々国民にとって何といても国土が狭い。

(9)' あたしには、この列車は、速いねえ。

(10)' 初心者には、バスケットボールは、ずいぶん重いものだ。

(9)'を例にとって考えてみると、「この列車は速い」ことを、感じ手「あたし」が感じとっているわけである。(9)ではなく、わざわざ(9)'が発話されるからには、誰もが「この列車は遅い」と感じるであろうことを感じ手が知っていて、自分だけが異なる感じ方をしているという自覚があるというのが自然な解釈である。つまり、「感じ手」は言語外の「一般者」に対して対比的に提示されているということである。

「狭い」や「速い」や「重い」が主観性を持ち得ることは、(8)'～(10)'によって確認され、遡って(8)～(10)についても言語外の「一般者」に関して(8)'～(10)'と共通していることが確認できるのである。

「一般者」は実際には範囲が限定されていて、「すべてのあらゆる人」ではない場合が多いが、「話し手」がそれを問題にしていない。例えば、(11)の話し手は幼児にとってそれが「重い」かもしれないということを全く問題にしていない。

(11) 練習用のバットは軽い。

つまり、「一般者」というのは、その発話ごとにその文脈の中で決まるということである。すると、幼児を一般者の中にもめるような文脈では、(11)'のように表現されることになる。

(11)' 普通の大人にとっては、練習用のバットは軽い。

すべての形容詞に「感じ手」の存在を前提とすることは、形容詞そのものの本質として主観性があることを論じているわけである。「数量の比較表現」はやや事情が異なるが、第7節で詳述する。

## 2. 知覚共有の信念

認識論でしばしば論じられる、物理的事象と人間の知覚や認識との関係も、事象の静的な状態を題材とするときは、形容詞をそのまま使って、メタ言語的なものを必要としないことが多い。これは、事象と知覚との間にギャップがあるにせよないにせよ、その知覚世界と我々の言語現象は、全くギャップがなく直接結び付いていることが、意識されるとされないとに関らず認められているということを示している。それが正しいのならば、認識論は同時に言語理論（特に意味論）となるはずである。

そこで以下に、認識論的な形容詞意味論を述べる。なお、その前半は、主に大

森莊蔵氏の諸説に基づいている。

人間は他人の主観世界における知覚像を知覚することは不可能であり、従って自分が見ている「赤い」物体と、他人がその同じものを見た時に見える赤さが同じものであるという保証は全くない。全く異なる見え方をしていたとしても、言語上の問題は生じない。これらのことを指して、「知覚の相対性」と呼ぶ。これによって「赤い」という色が個人的主観性と社会性の媒介となっていることが察せられる。いずれにせよ、その「赤さ」は人間の個人的主観性における相対的なものであって、知覚の上での事象である。人間の知覚を前提としない絶対的客観的事象には、「赤い」と「青い」も全くないと考えねばならない。客観的な「赤」がどういう色であるかを、人間の知覚の内にある色彩によって定義しようとするれば、結局相対化してしまっただちに客観的でなくなるという自己矛盾を抱えてしまう。そこで、絶対的客観的事象の中に存在するのは自然科学的なデータだけだと考える。物理的実在が光線を反射する際に、一定の幅の波長の光線を反射し、他を吸収するという物理的事実、また、それが数値化したデータこそが、人間の知覚における「赤さ」と対応する絶対的客観的事象だというわけである。

今述べたことは、絶対的客観的事象は、人間にとっての知覚像（視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚によって経験される事象）とはカテゴリーを全く異にするということである。知覚とは、事象が人間の肉体の一部である感覚器官という媒体を通過したものであるから、これは当然のことである。このことを自覚するのは実は容易である。例えば、赤外線のように、物理的には存在しながら、人間の感覚器官が受容できないものがあること。近視や遠視のように感覚器官の側の異常によって知覚像に違いが生じるということ。また、人間は自らの皮膚をいくら凝視しても個々の細胞を知覚することはできないという精度の問題。逆に、人間の視覚がこのように粗いものだからこそ、新聞紙上の写真のような大小の点の集合から何らかの像を見て取ることが可能であったりもする。これらは言われてみればすべて当然のことであり、人間の知覚の中で最も精度の高い視覚もこのように相対的なものなのである。

視覚に於いては光線もまた媒介である。人間は通常、「物」を見ているのであって「光線」を見ているのではないと信じている。そう思って差し支えがないのは、光線のスピードの速さと直進性のおかげである。実際のところ、人間の知覚する「光線」と絶対的客観的事象との間にも、大きなズレが生じている場合がある。例えば、今日の夜空に見える星は、数億年の過去に放たれた光線であったりする。その星は実際には既に消滅しているという場合もある。

ところで、上に述べた「物理的実在と知覚像とのズレ」は自然科学的方法によって確認でき、その意味での客観的と主観的との対比もデカルト的二元論で問題となるレベルで極めて認識論的である。しかし、人間は日常生活に於いて、「客観的」という概念を必ずしもそういった物理的実在を指すために用いてはいない。例えば、授業中の教室で一人の生徒が奥歯の虫歯を「痛い」と感じることは他の生徒と共有し得ないが、その教室の黒板が「黒い」ことは生徒の全員が認める。むしろ、「黒い」という言語表現のおかげで、生徒たちは互いに同じ視覚像を共有していると信じる。そのような信念を持ち得る時に、その黒さに対して「客観的」という言葉が用いられている。

さらに、仮に男子生徒たちが若い女教師の美醜について談義しているとして、「美しい」や「醜い」など、本来主観的な感覚に基づくものであっても、他者と同質の感覚を共有し得るという信念さえあれば、(12)の発話に違和感を感じない。

(12) 山田先生は客観的に見て美しい。

いわゆる「属性形容詞」と「感情形容詞」の区別を我々が直観的に理解できるのも、そこに原因があると考えられる。つまり、他人と共有し得るとの信念を伴う知覚の言語表現が「属性形容詞」で、そうでないものが「感情形容詞」だということである。他人と知覚を共有できるという信念は、それが個人の外の事象であるという信念だとも言える<sup>3)</sup>。

なお、ここで言う「信念」は、結局のところ主観的なものだから、規則として定式化できる性質のものではない。また、これまで絶対的客観的事象というくどい表現を用いてきたのは、(12)のような知覚の共有からくる「客観的」と区別するためであった。今後は、絶対的客観的事象は、単に物理的事象と呼ぶことにする。

客観的事象に対する主観的評価ともいえるべき第三の範疇を設ける考え方がこれまでもあった。確かに語彙としては、一方の分類に含めることができないが、構文上の特質だけを考えると、事例によって属性形容詞か感情形容詞のどちらかに分類されるので、第三の範疇を設ける必要はない。つまり、構文の分類と語彙の分類は区別すべきである。事例として、(13)、(14)を挙げておきたい。

(13) あの娘は客観的に見てかわいい。

(14) 目に入れても痛くないほど、息子がかわいい。

いずれにせよ、「知覚共有の信念」という概念の導入により、すべての形容詞が「感じ手」を意味的に伴っており、つまり大なり小なり主観的であることを確認できた。

### 3. 対基準性

形容詞には対になっているものが多いが、特にいわゆる「属性形容詞」に於いては顕著である。(15)はその代表的なもののいくつかである。

- (15) 熱い — 冷たい  
明るい — 暗い  
速い — 遅い  
重い — 軽い  
大きい — 小さい  
硬い — 柔らかい  
遠い — 近い  
広い — 狭い

Osgood et al. (1957) では、語に対する話者の情緒的反応つまり内包的意味（意味体系の中での他の語との対立でなく、その語の持つ意義の範囲内における情緒的な個人差とでもいうべきもの）を測定するために S D 法（Semantial Differential Technique）が用いられている。これは、まさに形容詞の特性を活かしたものである。ここで目盛りの両端に置かれた形容詞の扱いは、第一に、主観的なもの、情緒的なものとされており、第二に、対語のそれぞれの示すものが量的に相対化されているというところに特徴がある。

Osgood は英語をテキストとしているが、日本語でも既にこの方法を用いて実験が行われており、普遍的な形容詞の意味について、示唆を与えてくれそうである。「大きい」と「小さい」を例にとって考えてみたい。

ある事象が「大きい」と感じる時に、同時に「小さい」と感じることはなく、「小さい」と感じる時に、同時に「大きい」と感じることはない。つまり、両者は徹底的に排他的な関係にあって、一つのシステマティックな構造を成している。両者から、仮に意味素性（semantic feature）を抽出するとしたら、事象に対して「大きさ」という尺度を当てること<sup>4)</sup>が共有されて、正の方向に位置するか、負の方向に位置するか、という値だけを対立させていると見ることができる。従って、「大きさ」という尺度について、正負の評価・決定を下す何らかの基準が存在すると考えられる。

なお、一つの尺度上の値は二極的である場合、二極が対等であることはなく、必ずどちらかが正でどちらかが負という、価値付与的な側面を有していることも指摘しておきたい。そのため、尺度を言語化する場合に、一般的に正の方向の方

が採用される。例えば、「小ささ」よりも「大きさ」の方が尺度の名称として一般的である。

温度に関する触覚に基づく「冷たい」、「熱い」を例にとって考える。物理的事象としての温度の中に、「冷たい」から「熱い」への転換点が存在するだろうか。前節で「赤い」を例にとって考えたように、物理的事象と直に対応するのは科学的データだけであり、温度に関して言えば、 $-260^{\circ}\text{C}$ とか $0^{\circ}\text{C}$ とか $37^{\circ}\text{C}$ とか $1000^{\circ}\text{C}$ とか数値という形で示されるものだが、数値の持つ示差性は量的で連続的なものである。そこには質的な転換点または不連続点は一切見出すことはできない。もし、人間の知覚がこのような物理的事象としての温度と直接的に対応し、それを形容詞が表現しているとしたら、「熱い」、「冷たい」の二語は必要ない<sup>5)</sup>。いずれか片方（正の方向に当たる「熱い」の方が無標となるだろうが、いずれにせよ仮定に過ぎない）、あるいは第三の形容詞を用いて表現されるべきである。日常言語が二語を必要とするのは、話者が何らかの方法で設定した基準が存在し、その基準との相対によって、自らの知覚に対して正か負かの排他的な評価が行われるからである。

このことから、「基準」との相対を形容詞成立のための基本的性質と考え、この性質を「対基準性」と呼ぶことにする。一方、物理的事象が、そのような基準を一切持たないことを、それと対比させて「無基準性」と呼ぶことにする。

なお、「水」等の液体の場合、「ぬるい」が含まれ、三語の対立となる場合もある。その場合は、「熱い」と「ぬるい」の対立を見ても、「冷たい」と「ぬるい」の対立を見ても、「ぬるい」には負価が与えられ、それぞれ、「必要な熱さが不足している」、「必要な冷たさが不足している」という否定的な意味で用いられる。従って「ぬるい」は、「熱さ」という意味素性に「不十分」とか「中途半端」という特殊な意味素性が加わったものと考えることができるが、この二つの対立を個々に見れば、他の形容詞の対と同様、それぞれに一つの基準があると考えてよい。

物理的事象を記述する際の言語に於いて、「熱い」ではなく「温度が高い」という表現が用いられるのは、「熱い」の持つ対基準性を排除するためである。

(15)  $-2^{\circ}\text{C}$ より $-1^{\circ}\text{C}$ の方が温度が高い。

(16)  $-2^{\circ}\text{C}$ より $-1^{\circ}\text{C}$ の方が熱い。

(15)は自然だが、(16)が不自然に感じられるのは、「熱い」という語の持つ「基準」が $-2^{\circ}\text{C}$ 、 $-1^{\circ}\text{C}$ のいずれよりもずっと高いところにあるためと言える。

西尾(1972)でも、「なだらかだ」と「けわしい」を例として同様の言語現象

について述べているが、比較表現だけの特殊な現象として説明しているのは本質的でないと考える。

数値そのものの記述は、もはや形容詞の「対基準性」と相容れないためか、名詞述語文によってしか示されない。

(17) 60℃の熱さである。

(18) \*60℃に熱い。

(18)の二は、デ、ト、ノなど他のどの助詞に入れ替えてもやはり非文である。(17)よりも、さらに(19)の方がなお自然だろう。

(19) 温度は60℃である。

数値を扱っても、比較表現ならば形容詞を用い得るのは「対基準性の喪失」が可能だからである。これは第7節で改めて述べる。

「対基準性」の理解のために、対になっている形容詞を例にとったが、一見「対」がないとされる「丸い」や「赤い」でも考え方は同じである<sup>6)</sup>。これらの対応する物理的事象は、温度のような線状的な科学的データとしては表されない。このような語群はそれ自体が質的であることを利用して、「形」「色」の概念群の中から単独で抽出され、しかしながらそれ自体の中に基準を設定して判定がなされる。

例えば、色について「赤」だけを問題にすれば、ある物理的可視的存在は、「赤い」か「赤くない」かのいずれかであり、そこに基準は存在している。そのような基準が複合的に用いられ、全体としては多極的になっている。つまり、「赤い」ということは「赤以外の一切の色でない」ことと同義である。色の数は各言語、各民族文化によって様々である。

#### 4. 基準の主観性

(20)に於ける、「熱い」と「ぬるい」の間の対立の基準について考えてみたい。

(20) 今、風呂を沸かしてるけど、まだぬるいよ。

この文の話者が持っている基準を数値で何℃と表現することは不可能である。物理的事象が人間にとっては科学的データとしてしか認識し得ないことは第2節で既に述べたが、逆に、知覚世界が絶対に数量化できないものであることはまだ論証していない。その論証のためには、対基準性における基準の設定の仕方を検討することが有効に働くはずである。

要するに、対基準性における基準は全く数値化し得ない性質のものである。

仮に、以下のような実験を試みるとする。数人の被験者に、水中に指をつけてもらい、等速的に加熱し、一定の時間間隔を置いて、その時の温度に関する触覚



を「冷たい」、「ぬるい」、「熱い」の三語から一語を選択して表現してもらい、二ヶ所現れると予測される転換点を、測定結果をもとに数値として特定するのである。しかし、この実験は、実際に行うまでもない。被験者の間で数値が一定しないことは十分に予測ができる。被験者のその日の体調によっても結果が変わる。体温が高ければ、平常時より冷たく感じるはずだ。また、このような連続的な変化の中では、自らがもつ基準自体が揺さぶられるだろう。同じ温度の水でも、指を入れた瞬間に感じる冷たさと、入れたままで慣れた時に感じる冷たさとは、異なるはずである。さらに、人間の皮膚が感じる温感には、温度以外の要素も関係してくる。同じ気温でも湿度の違いが「暑さ」の違いとなることや、また、「風」によって体温の発散が促進されて、「冷たく」感じることも等はずわわ言うまでもなからう。このように、物質の温度と人間の触覚における「熱さ」との間には、確実な隔たりがあるのだ。

このことを逆に言えば、測量器を用いずに、自分の温感のみで気温や水温の数値を言い当てることがまず不可能であることをも意味している。

触覚に限らず、視覚をはじめ他の感覚に於いても事情は同じである。ひもの長さを視覚だけで数値としてピタリと言い当てることは、本来できるものではない。

ここまで、基準が漠然としたものであることを、数量化との関連で論証しておく必要のあるいわゆる「属性形容詞」を例にとって考えた。いわゆる「感情形容詞」であれば、基準が漠然としたものであることは、論じるまでもない<sup>7)</sup>。

## 5. 科学的データへの経験付与

数値化できる物理的事象と対応している形容詞の場合、測量器を用いた数値の比較による(15)のような表現が存在する。これは科学的データに対応する、真偽値をもった形容詞文である。

(15)  $-2^{\circ}\text{C}$  より  $-1^{\circ}\text{C}$  の方が温度が高い。

それを知覚に基づく主観的な表現に置き換えればになるが、やや不自然であることは第3節で述べた。しかし、(21)では(16)の不自然さは認められない。

(16)  $-2^{\circ}\text{C}$  より  $-1^{\circ}\text{C}$  の方が熱い。

(21)  $56^{\circ}\text{C}$  は  $55^{\circ}\text{C}$  より熱い。

実際のところ、 $56^{\circ}\text{C}$  と  $55^{\circ}\text{C}$  の違いが我々の温感にとって知覚し得るとは考えにくい。従って(21)は、数値の特定に於いても、二者の比較に於いても、触覚に基づくものでないことで(17)や(19)と共通している。

(17)  $60^{\circ}\text{C}$  の熱さである。

(19) 温度は60℃である。

一方、(22)ならば、知覚による数値の特定はできなくとも、比較という行為に対しては、経験上の実感が伴う。

(22) 56℃の湯は、10℃の水より熱い。

このような例では、それが感覚を伴わない単に測量された数値であっても、実際に指で知覚した感覚に基づくものであっても、我々は同等に経験からくる実感をそこに与えていることに気付く。このことを「科学的データへの経験付与」と呼ぶことにする。これによって我々は、日常の中で知覚世界と物理的事象との間のズレをほとんど意識することなく過ごせていると言ってもよい。これによって、(21)に於いても、あたかもそれを温感として知覚しているかのように感じさせ、この表現を成り立たせるのである。極端に言えば、これを徹底させることによって、不自然だったはずの(16)に受容可能な解釈を与えることができる。

温度計の精度を高めれば、人間が到底知覚し得ない百分の一℃の単位まで数値として示すことは可能だし、また、人間の皮膚が耐えられない超低温や超高温を数値として示すことも可能だろう。いずれにせよ、我々は「温度が高い方が熱い」という経験的知識により（厳密には思い込み）、「科学的データへの経験付与」を行う。それにより、56.01℃より56.02℃の方が熱いと類推し、2000℃より3000℃の方が熱いと類推しているのである。

科学的データへの経験付与が行われる以前のいわゆる属性形容詞が持つ「基準」は、いわゆる感情形容詞のそれと同様、きわめて漠然としたものである。

## 6. 基準の設定法

前節までで、あらゆる形容詞が本質的に持つ「基準」が数値化できる性質のものではないことを論じたが、それは、既に概ね明らかなように、「基準」が主観的世界の側に所属するものだからである。基準の設定の仕方に即してそのことを考えてみたい<sup>8)</sup>。

第一に、ある物理的事象について、ある形容詞の意味素性である尺度に関して、平均的な値があることを経験的に知っていて、それを「基準」とする場合である。例えば、(9)では、列車の速さに関する平均的な値が経験的に知られており、それが基準となっている。このような場合、話者には必ず知覚共有の信念がある。

(9) この列車は、速いねえ。

第二に、平均的な値が定まらない場合に、また仮に定まっている場合にもそれとは違った位置に、自分の期待を置くことにより、それを基準とすることがある。

(23) 新幹線と言っても、思ったより遅いなあ。

(23)の話し手は、新幹線というものは飛行機のように速いものだと思い込んでいて、その期待を基準として、実際に知覚した新幹線の速さが、時速200kmで走っているにも関わらず、「遅い」となったのであろう。自分の設定した基準が特殊な位置にあるという自覚がある場合には、「思ったより」などの形式でそのことを表現できる。これは文字通り主観的である。

第三に、その物理的事象が人間の生活にとって、どのように接しられているかも要素として関ってくる。例えば、60℃の湯はコーヒーにして飲むには「ぬるい」が、風呂の湯としては「熱い」。部屋の広さなど、住む人の人数によって「狭く」なったり、「広く」なったりする。但し、この設定法は第一・第二の設定法と平行的にあるのではなく、これによって特定の状況を設定して、結局は第一・第二の方法で基準を設定するわけである。第4節で仮に示した実験は、舌ではなく手で温感を知覚することを指定しているから、既に特定の状況を設定されたものといえることができる。

以上、明文化できるものを三種述べた。これらは客観的のように見えても主観的な設定法である。これら以外の方法で基準が設定されることがあるとすれば、それはより主観性の強いものであるはずだ。

## 7. 比較表現における数値的基準

基準の設定法の第四として挙げる比較表現の場合は、これまでとは性質が異なる。

主観的世界における知覚像を数値化することはできないし、従って「この湯は熱い」は真偽値を持たないことはこれまでに既に述べた。同様に知覚像に基づく比較表現「この湯はあの湯より熱い」も真偽値は持たない。(21)だけは、「科学的データへの経験付与」を前提として成立するにせよ、一応真偽値を持っている。この文では「基準」が「55℃より」という形で形式化している。

(21) 56℃は55℃より熱い。

形容詞の本質は「対基準性」にあり、その「基準」が主観性の強いものだからこそ、形容詞文の意味も主観性の強いものになった。それに対し、(21)では基準が数値化され、それによって、形容詞文全体としての意味も、科学的データへと転化した。その段階では、(21)と(16)は質的に連続している。

(16) -2℃より-1℃の方が熱い。

「熱い」のかわりに「温度が高い」を用いれば、(15)のように不自然さはなくなる

が、これも、(24)のような表現と質的に連続している。

(24) 56℃は55℃より温度が高い。

要するに、これらは基準が数値として形式化したために、形容詞がもともと持っている対基準性を失い、(25)と同様な「無基準性」を持つに至ったと考えられる。

(25) この水は温度が30℃だ。

(25)の場合は、意味的に基準を持ち得ないから形容詞文にはなり得ないが、(21)や(22)の場合は、形容詞そのものの対基準性が失われても、意味的に成立した「数値的基準」があることにより、形容詞文としての成立を可能にしている。

故に、(16)は基準「-2℃より」を省略すると不自然を通り越して不適格である。

(26) -1℃は熱い。

(26)では、「熱い」がもともとの対基準性を取り戻すために、主観的な基準が介入してしまい、その結果、不適格となるのである。このように、数値化した比較表現は特殊な状況にある。

ともあれ、人間の知覚は基本的には大雑把なものであり、このような性質を持つ人間の知覚の上に自然言語の形容詞の意味が成り立っていることを確認したい。故に、科学的な記述にこれをそのまま用いることはできない。比較表現はその例外なのである。

## 8. まとめ

本稿では、各節にそれぞれの結論が述べられているが、全体を振り返って、簡単に四点を挙げたい。

第一に、すべての形容詞文が感じ手による報告という主観性を持っていること。第二に、属性形容詞が持っている通常理解されている客観性が、知覚共有の信念という主観性に由来するものであること。第三に、多くの属性形容詞が対基準性という性質を有しており、それもまた主観的なものであること。その設定法に於いても主観的であるということ。第四に、比較表現においては、形容詞文の主観性が排除されるということ。

以上論じたことは、この段階では、何らかの言語現象を説明する原理として述べたものではない。形容詞文の構文を論じる前提となる、意味論的研究である。故に、その最終的な成果は今後に残している。

### 【注】

- 1) 山岡（未発表）。また、山岡（1993）はその構想をもとに、限定されたテーマについての論考を試みた研究ノートである。

- 2) ここでの「感じ手」は草薙（1977）の「情報提供者」とほぼ同義である。
- 3) 山岡（1993）では、情報帰属理論によって内的経験空間と外的経験空間を区別することを既に提案しているがと、ある情報について、他者と共有し得るとの信念の有無によって、いずれの空間に帰属するかが決定するということである。
- 4) このように対の形容詞が共有する「尺度」は、いわば人間が事象に対する接し方を表している。例えば、一つのケーキがあった時に、味に注目したり、大きさに注目したり、温度に注目したり、固さに注目したり、あたかも、異なる目盛りを持った数種の物差しを当ててのようなもので、それぞれ一つの尺度について一つの対基準性がある。
- 5) 関連して、日本語の名詞「湯」と「水」の違いも、知覚像における「熱い」と「冷たい」に対応しているようであり、興味深い。「ぬるい」に対応するのは「ぬるま湯」か。
- 6) 「丸い」は知覚像としては、「角張っている」や「四角い」と対立しており、正確な幾何学的円や球を指すものではない。

また、味という尺度では、「甘い」と「辛い」が単純対立の関係にあると知覚されながらも、実際のところ「苦い」、「渋い」、「酸い」等も同レベルで対立しており、むしろ「色」の尺度に似ている。これらを複数対立の尺度と呼んでもよからう。
- 7) なお、草薙（1977）では、本稿での「基準」に当たるものを「何らかの条件」として、情報提供者（本稿の感じ手）の外に本来存在するものとしているが、本稿ではこの基準こそ形容詞の主観性の源泉であると考えているため、草薙の論述は改めるべきと考えている。
- 8) Leisi (1960) の四つの基準を参考にした。Leisi は①種の基準 (Speziesnorm) ②比率的基準 (Proportionsnorm) ③個人的な期待基準 (Individuelle Erwartungsnorm) ④適格基準 (Tauglichkeitsnorm) を挙げている。但し、②比率的基準は、例えば縦横同じ長さのテーブルを長いとは言えないといった、いわば「尺度」選びに関する基準であり、尺度そのものが持つ基準とは異なるので、参考にしていない。

#### 【参考文献】

大森荘蔵（1969） 生命と意識『科学の基礎』東大出版会

大森荘蔵（1963） 他人と言葉『人文科学科紀要』29号 東京大学人文科学科

- 大森莊蔵 (1969) 痛みと私『心』昭和50年11月号 平凡社
- 草薙 裕 (1977) 日本語形容表現の意味『文芸言語研究』2・言語篇 筑波大学文芸・言語学系
- 寺村秀夫 (1973) 感情表現のシンタクス『言語』第二卷第二号 大修館書店
- 西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』国研報告44 秀英出版
- 山岡政紀 (1993) 感情の問いかけと情報帰属理論『日本語日本文学』第3号 創価大学日本語日文学会
- 山岡政紀 (未発表) 経験の帰属空間と形容詞述語文の諸問題
- Leisi, E. (1960) 『意味と構造』(鈴木孝夫訳) 研究社
- Osgood, C. E. et al. (1957) The Measurement of Meaning. Univ. of Illinois Press.  
(やまおか・まさき, 本学 専任講師)